



生きることは 絵を描くことに値するか 下

破天荒な日本のゴッホ、長谷川利行と養育院

栄畑南美(えばた なみ) 老年学情報センター

櫻園通信 58 令和2年4月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

利行は、酒癖と放浪癖から、だんだんと胃を病み体が衰弱していきます。

ついに1940年春、三河島駅近くの路上で行き倒れ、養育院に收容されます。胃癌でした。

矢野文夫編『長谷川利行全文集』に、利行が養育院から親友・矢野文夫宛てに出した葉書の文が載っているので、以下引用します。利行は、養育院の第5病棟に收容されていたようです。

昭和15年5月31日 矢野文夫宛

養育院第五病室二胃ノ手術デ居リマス。午前中ニ一度ミニ来テ下サイ。

〔中略〕 (至急来テクレナイト死亡スル、動ケナイノデス) 市電板橋終点ヨリ一丁ホドノ処デス。

板橋区板橋町東京市養育院第五病棟内 長谷川利行出

(矢野文夫編、1981年、p.305)

この葉書を受け取った矢野は、友人と一緒に養育院へ駆けつけます。

その養育院での面会の様子が、矢野の前提書に記載されています。

陰湿な消毒薬の匂いが水のように漂う暗い病棟—そこは百畳敷ほどの広さで何十というベットが二列に並んでいた。土色をした粘土のような顔が一斉にわれわれ闖入者を冷たく凝視するような気がした。

長谷川は磨り切れた白衣を着ていたが、むくっと起き上がった。

〔中略〕

「外に出よう、裏に花畑がある」

〔中略〕

花圃には白い雛菊の花が一めんに咲いていた。「その花の中にしゃがめよ、一枚撮ろう」

一枚うつすと、彼は、突然大声を発した。それは烈しい怒りに燃えた何ともいえぬ不気味な動物のような唸り声とも聞けるものであった。

「糞っ！ 死んだろか！」

ごろっと花の中に仰向けにひっくりかえった。白眼をむいて、抉るように私を鋭く凝視した。（前提書、pp.305-307）

自画像



矢野の記述から、当時の養育院と利行の暗い様子が伝わってきます。矢野は、この面会時に「長谷川は死ぬ」と予感したといいます。

そして、1940年10月12日、利行は49歳で亡くなりました。

矢野（1981）は、「誰ひとり看取る者なく死んだ。遺品のスケッチブックや手記など、養育院の規則によりことごとく焼却された」（p.315）と書いています。

焼却処分は当時の規則なので仕方ないのですが、もしスケッチブックなど遺品が現在に残っていれば、いったいいくら
の値段が付いたのだろう、と勝手に思いますね。

さて、1969年（昭和44年）、上野不忍池のほとりに利行碑が建立されました。石碑の文字は、親交のあった熊谷守一が書きました。

その隣には、利行が詠んだ歌二首が刻まれた歌碑があります。そのうちの一首を最後に紹介しましょう。

人知れず朽ちも果つべき身一つの いまがいとほし涙拭わず

養育院で亡くなった破天荒な画家、長谷川利行。彼は、「今」を純粹に愛した画家だったのかもしれませんが。



【参考文献】

近藤祐（2011）『洋画家たちの東京』彩流社

矢野文夫（1974）『長谷川利行』美術出版

——編（1981）『長谷川利行全文集』五月書房

吉田和正（2000）『アウトローと呼ばれた画家—評伝 長谷川利行』小学館

「長谷川利行」『Wikipedia』<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E8%B0%B7%E5%B7%9D%E5%88%A9%E8%A1%8C>

2020年4月20日最終閲覧